2024 年 8 月 26 日

東亜大学大学院　総合学術研究科
研究科長　金田　晉　殿

人間科学専攻　論文審査委員会
主査　金　俊

博士論文（甲）審査報告書

博士論文（甲）の審査を実施いたしましたので、下記のとおりご報告申し上げます。

記

１．論文提出者　　韓　琦
２．論文題目
家畜動物を用いたメタファー表現に関する研究序説
―日中の諺・慣用句における「馬」と「牛」を対象に―

３．論文審査委員会　主査　東亜大学大学院　教授　金　俊
副査　東亜大学大学院　名誉教授　古川　智
副査　東亜大学大学院　准教授　帖佐　幸樹

<論文内容の要旨>

本学位審査申請論文は，認知言語学におけるメタファー研究の一つとして位置づけられる。しかし，その研究内容はメタファー研究に留まらず，学際的な特徴を持つ内容に仕上がっている。

本研究は全 6 章で構成される。以下その概要について述べる。

まず，第 1 章では，本研究の問題の所在，及び，研究の動機と目的が述べられる。具体的には，元来人類と家畜動物は密接に関わってきたことが多数の文献をもとに述べらる。また，認知言語学におけるメタファー研究においても，メタファー表現は人間の経験的基盤と深く結び付いていることが紹介されている。そのような背景のもと，動物，特に家畜動物がメタファー研究の対象とされるのは必然であることを指摘している。しかしながら，家畜動物と言いながらも，実際には，「牛」や「馬」，あるいは「犬」といったように家畜動物の中の個々の動物をメタファー研究の対象とするものがほとんどであり，家畜動物というより大

きなカテゴリーにおいて考察したものはほぼ皆無であることを批判的に述べる。それと同時にこの観点は，学術上決して無益な観点ではないことを，多数の先行研究において家畜動物間の対比が指摘されていることと，メタファー表現の間に何等かの関係性を見出すことが可能であるのかという 2 点をもって説明している。その上で，本論文ではメタファー表現の最も端的な現れである日本語と中国語の諺・慣用句をデータとして用い，以下の 2 点を明らかにすることを目指している。

① 家畜というより大きなカテゴリーを設定した際に，個々の家畜動物の間にはどのような関係性があるのかを明らかにする

② 日本語と中国語の諺・慣用句における「馬」,「牛」のメタファー表現の比較対照を行うことで，どこまでが地域特性が反映された結果であり，また，どこまでが，言語普遍的な現象として説明可能であるのかを明らかにする

また，本論文では，様々な家畜動物の諺・慣用句を見渡した結果，日中の諺・慣用句において，他の動物と比較した際に,「馬」と「牛」の場合において，顕著に対比関係が見られることを見出している。それを踏まえ，本論文ではケーススタディとして「馬」と「牛」に着目して，その関係性を追求することが述べられている。

次に，第 2 章は，家畜動物というより大きなカテゴリーを設定した上で，動物に関する諺・慣用句に関する研究，動物のメタファー表現に関する研究，そして,「馬」と「牛」のメタファー表現に関する研究を批判的に検討することによって，先に上げた 2 つの研究目的を追求することが学術上有益であることを示した章である。具体的には，まず動物の諺・慣用句に関する先行研究を批判的に検討することを通じて，多くの先行研究において動物間の関係性を指摘していることを示している。しかしながら，それらの先行研究は，関係性を示唆するに留まっており，具体的にどのような関係性を取り持っているのかについては言及していないことを指摘する。次に，動物のメタファー研究の観点から見た場合，先行研究においては，動物のメタファー表現には意味的な偏りが見られるという点で見解が一致していることを示す。しかしながら，これに関しても，なぜ動物のメタファー表現には意味的な偏りが見られるのかという点については追及されていないことを指摘する。さらに,「馬」と「牛」のメタファー表現に関する先行研究においては，日本語，及び，中国語共に多くの記述が確認されるものの，そもそも根源領域にどのような対象が設定されるのかといった観点が欠落していることを指摘している。その上で,「馬」と「牛」があるメタファー表現に同時に出現した場合，根源領域にどのようなものとして投射されているのかについて追及しなければならないとする。以上の先行研究から導出された問題点を踏まえ，本論文では以下の 3 つの研究課題を設定している。

課題① 日本語の諺・慣用句における「馬」と「牛」のメタファー表現の間にはどのような関係性が見られるのか，その関係性を明らかにする。(第 3 章)

課題② 中国語の諺・慣用句における「馬」と「牛」のメタファー表現の間にはどのような関係性が見られるのか，その関係性を明らかにする。(第 4 章)

課題③　日中の諺・慣用句における「馬」,「牛」のメタファー表現を比較対照し，その異同を明らかにする。(第 5 章)

第 3 章は日本語の「馬」と「牛」に関する諺・慣用句を分析することを通じて，研究課題①への回答を行った章である。具体的には,「馬」と「牛」のそれぞれの諺・慣用句について，2 冊の日本語の諺・慣用句辞書から収集したデータを用い，そこから 3 例以上が見出されたものを「特徴的な表現群」として抽出・分類を行っている。その後,「馬」の諺・慣用句における特徴的な表現群と,「牛」の諺・慣用句における特徴的な表現群を比較することによってその関係性を明らかにしている。分析の結果,「馬」の特徴的な表現群としては,①「優れたもの」,②「荒さ」,③「脚の速さ」,④「消耗品」,⑤「見極め」,⑥「地位の高さ」,⑦「体高」という 7 つが抽出された。また,「牛」の特徴的な表現群としては,①「脚の遅さ」,②「劣ったもの」,③「売買の対象」,④「地位の低さ」という 4 つの特徴が抽出されたと報告している。さらにここから,「馬」と「牛」のメタファー表現には,①「優れたもも／劣ったもの」,②「脚の速さ／遅さ」,③「地位の高さ／低さ」,④「持久力の有無」,⑤「落ち着きの有無」という対立関係が見出されること，及び，この対立関係はいずれも相対的な意味であることを実証している。以上を踏まえ，本論文では課題①への回答を以下のようにまとめている。

① 「馬」と「牛」のメタファー表現においては，馬と牛とが対立関係を前提として成立している表現が見られること。

② 「馬」と「牛」が対立関係を成している表現は，考察の範囲においては相対的な意味を表す場合であったこと。

③ メタファー表現によって表される意味的特徴に偏りが見られることには，今回のような二つの対象における対立関係が前提となっていることが一つの要因として関わっている可能性があること。

続く第 4 章は，第 3 章と同様の分析手法を用い，中国語における「馬」と「牛」の諺・慣用句の分析を行い，課題②への回答を行った章である。分析の結果,「馬」の特徴的な表現群としては,①「地位の高さ」,②「優れたもの」,③「財貨」,④「脚の速さ」,⑤「体高」,⑥「臆病」,⑦「見極め」,⑧「軽率さ」,⑨「恩義」,⑩「従順」という 10 個が抽出された。また,「牛」の特徴的な表現群としては,①「体高」,②「財貨」,③「劣ったもの」,④「地位の低さ」,⑤「頑固」,⑥「力の大きさ」,⑦「脚の速さ」,⑧「堅実さ」という 8 つの特徴が抽出されたと報告している。さらにここから,「馬」と「牛」のメタファー表現には,①「優れたもも／劣ったもの」,②「脚の速さ／遅さ」,③「地位の高さ／低さ」,④「軽率さ／堅実さ」,⑤「従順(素直)／非従順(頑固)」という対立関係が見出されること，及び，この対立関係はいずれも相対的な意味であることを実証している。以上を踏まえ，本論文では課題②への回答を以下のようにまとめている。

① 「馬」と「牛」のメタファー表現においては，馬と牛とが対立関係を前提として成立している表現が見られること。

② 「馬」と「牛」が対立関係を成している表現は，考察の範囲においては相対的な意味を表す場合であったこと。

③ メタファー表現によって表される意味的特徴に偏りが見られることには，今回のような二つの対象における対立関係が前提となっていることが一つの要因として関わっている可能性があること。

第 5 章は，第 3 章と第 4 章の結果を踏まえ，日本語と中国語の「馬」と「牛」の諺・慣用句の比較・対照を行った章である。本論文では課題③に対する回答を以下のようにまとめている

〇共通点

① 日中の「馬」,「牛」のメタファー表現から抽出される特徴的な意味には偏りがあり，また同じ特徴に偏っている表現も観察されること。

② 日中の「馬」,「牛」のメタファー表現においては，相対的な意味を表す場合，馬と牛との対立関係を成していることが日本語においても中国語においても見られること。

③ 日中の「馬」,「牛」のメタファー表現においては，相対的な意味を表す場合，馬や牛の対立対象として他の動物が設定されることが日本語においても中国語においても見られること。

〇相違点

① 日中の「馬」,「牛」のメタファー表現においては，異なる特徴に偏っている表現があること。しかしそれでも，相対的な意味を表す場合に限られること。

② 日中の「馬」,「牛」のメタファー表現において，馬や牛と対立対象として設定される動物が異なっていること。しかしそれでも，相対的な意味を表す場合に限られること。

最終第 6 章では，本論文の意義及び，今後の展望が述べられている。具体的には，本論文の意義としては，家畜動物というより大きなカテゴリーで分析することの有用性を実証したと同時に，「馬」と「牛」という限られた家畜動物間ではあるが，メタファー表現間の関係性を示すことに成功し，されに，その意味的特徴を見出すに至っている。さらに，先行研究においては等閑視されていた，メタファー表現の意味が偏る要因についても，本論文の見出した動物間の対立関係を持ってすれば相対的な意味を表す場合においては説明可能であることを提案している。

学位請求論文は， 以上の全 6 章，及び，参考文献・資料 から構成されており，そのすべてが科学論文に相応しい記述となっている。

＜論文審査の結果の要旨＞

韓琦氏による学位審査請求論文に対する審査委員会を，審査員 3 名，及び，オブザーバーとして東亜大学大学院総合学術研究科人間科学専攻主任・瀧田修一教授にご出席いただき，令和 6 年 8 月 18 日に，9 時 00 分から 10 時 30 分まで，東亜大学にて開催した。

冒頭約 30 分で論文要旨の説明を韓琦氏が行い，その後に論文内容についての質疑応答を

約 45 分間行った。審査委員から複数の質問がなされ，それらに対しての回答が韓琦氏からなされた。回答の中には，審査委員の質問に対するものとしてやや不十分な回答もあったものの，いずれも論文全体の評価に影響するものではなく，修正検討課題とされた。その後，韓琦氏を一時退席させた後，合否判定を審査委員間で行った結果，審査委員会として「合格」の判定を下した。

次に，同日 13：00 に開催された公聴会において発表が行われ，公聴会参加者から複数の質問がなされ，それらに対しての回答が韓琦氏からなされた。公聴会終了後，合否の議論を専攻教員間で行った結果，人間科学専攻の総意として「合格」の判定を下した。

なお，審査委員会における審議の過程で，論文題目を論文内容に合わせるべきではないかとの指摘が複数の審査員から提案された。そのため，審査委員会立ち上げの際から論文題目の変更を行い，審査委員からも了承を経た。当報告書の論文題目は修正後のものである。

主たる審査委員会の審査内容は以下の通りである。

1. メタファー研究において根源領域は，理論モデルの精緻化，複雑化が進む現状においてもモデルの主要な基盤である。しかしながら，その根源領域の内実，より具体的には，根源領域にはどのようなものが投射されるのかといった議論が遡上に上ることはない。本論文は，家畜動物というより大きなカテゴリーを設定した上で，「馬」と「牛」のメタファー表現の分析を行い，根源領域には，対象だけでなく，2 つ以上の対象があるか関係性を伴って投射される可能性を示した。この提案は，今後，メタファー研究の分野において，根源領域について改めて考える必要性を提示するものとして高く評価できる。

2. メタファー研究においては，メタファー表現の表す意味に一定の偏りが生じることが動物のメタファー表現に限らず認められてきた。しかしながら，なぜそのような偏りが生じるのかということについては考察がなされていないのが現状である。本論文では相対的な意味を表す場合に限ってではあるが，メタファー表現の表す意味に偏りが生じる要因の一端を明らかにした点が高く評価される。また，今回の結果は，個々のメタファー表現を独立に分析することの限界を示したとも言え，それと同時にメタファー表現間の関係性を追求することの必要性を示した研究であるとも言える。

3. 上記に述べた，「馬」と「牛」が諺・慣用句の中で対立関係として現れ，また，それが相対的意味を表すことについては，韓琦氏の研究目的に沿って言えば，言語普遍的な現象であることを示唆するに至っている。それと同時に，相対的な意味が具体的にどのような意味で現れるのかについては，地域固有の特徴である可能性も示唆している。これに関しては，今後，日本語と中国語以外の言語によっても検証する必要があることを指摘しており，発展可能性のある課題であると言える。

4. 本論文では家畜動物の中でも「馬」と「牛」に限定された議論ではあるが，分析手法は他の家畜動物や，野生動物などにおいても援用可能である。そういった点において分析手法の確立にも寄与した研究であると考えられる。

以上、審査委員の審査及び公聴会の結果から、本論文は博士（学術）の学位を授与するに値するものであると認める。

以上